

[掲載紙] 上毛新聞「点描ぐんま経済」

[掲載日] 2015年4月24日

[テーマ] 文化資本たる群響—地方創生の起点に—

先週、群馬音楽センターで群馬交響楽団の2015オープニング・コンサートを聴いた。シーズンの幕開けにふさわしいブラームス「大学祝典序曲」、ベートーヴェン「交響曲第1番」、バルトーク「管弦楽のための協奏曲」という意欲的なプログラム。

演奏を聴きながら、村上春樹氏がかつてボストン滞在時の思い出をつづったエッセイ集（「うずまき猫のみつけかた」）の一節を思い出した。ボストンでボストン・シンフォニーを聴くのと大都会ニューヨークでニューヨーク・フィルを聴くのでは違う、ボストンの方が心地よい、というような内容だったように記憶している。

東京に住んでいた頃、在京オーケストラを何度も聴いたが、確かにその時の感覚とは何かが違う。地元のオーケストラに対する誇りや他の聴衆との一体感のような感覚がこみ上げてくるのだ。新鮮な感覚だった。そして同時に、群響のようなレベルの高いプロのオーケストラを身近に持つ当地の方々をうらやましく思った。

経済学における「ボーモルのコスト病」と呼ばれる問題（注1）においてオーケストラは象徴的な存在だ。経済的価値と文化的価値の両立も悩ましい問題の一つと言える。しかし一方で、「正の外部性」（注2）の存在は広く認められているところであるし、経済的価値の源泉という観点から、物質資本、人的資本、自然資本に続く第4の資本として「文化資本」を捉えようとする動きも着実に広がってきているように感じる。

「文化資本」は、自然資本と同様、「逃げない資本」であり、「逃げない産業」の育成には「逃げない資本」が必要なのではないかと思う。情報技術や交通インフラの発展などに伴って地方の均質化が進む今日、「文化資本」の蓄積と活用は、地方の特性を生かした地方創生の一つの重要な起点にもなっていくような気がする。

オーケストラのような「文化資本」の蓄積は一朝一夕にはできない。幸い、群響は長く貴重な歴史を持つ。今年は、群響の創立70周年、そしてモデルになった映画「ここに泉あり」（今井正監督）の公開60周年という節目の年でもある。本年9月のシルバーウィークに上演されるオペラ「蝶々夫人」をはじめ今シーズンのプログラムはどれも楽しみだ。当地における「文化資本」の重要性をあらためて認識するようなシーズンになればと期待している。

（注1）オーケストラのような労働集約的な部門では、製造業などでみられる労働生産性の上昇が難しいため、慢性的な費用増大と収入不足の拡大が惹き起こされるという問題。

（注2）地域に与える威信、教育的効果、将来世代にもたらすメリットなど、オーケストラを直接聴かない人々にも便益が及ぶこと。

日本銀行前橋支店長
富田 淳